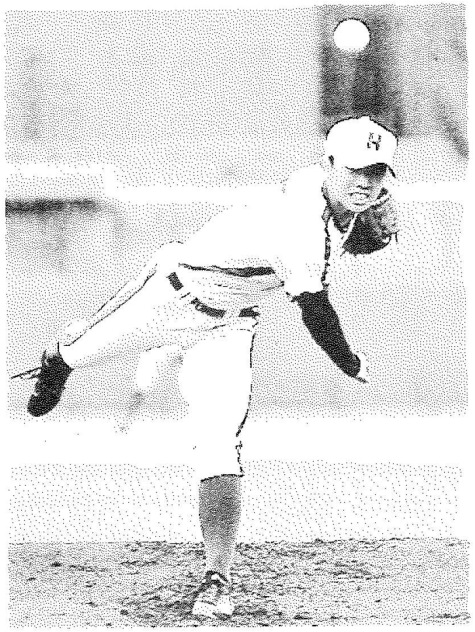
傷痕抱き 父追い 夢は続く

東大和 朝岡涼太投手（3年）



1点をリードされて迎えた九回表、2死一、二塁。マウンドに立つ東大和のエース朝岡涼太（3年）は気合を入れ直した。「三振にとって流れを持ってこよう」。直球で追い込んで5球目、得意のスライダーで三振に打ち取った。

朝岡が進学先に私立ではなく、都立の東大和を選んだのは父・雅洋さん(52)の影響だった。

都立高のエースだった雅洋さんは最後の夏、この日の対戦相手と同じ工学院大付に惜敗した。当時のエピソードを何度も語り、「高校野球は都立が強豪私立を倒すところが面白い」。

甲子園を目指す原点は、幼少期の体験だ。

朝岡は生まれた直後、生命の危機にあった。腸の難病で、主治医は「助かる確率はとても低い」。今でもおなかには長さ10センチほどの手術の傷痕が2本残っている。

小さい頃はこの傷痕が嫌いだった。10歳の時に両親が闘病生活の映像を見せてくれたことで考えが変わった。管をつながれた新生児の自分と、心配そうに見守る親や親戚、医師や看護師の姿があった。「今の自分がいるのはいろんな人のお陰なんだ」。嫌いだった傷痕が少し誇らしく思えるようになった。

両親や支えてくれた人たちの思いに応えたい。甲子園に出て、自分のように病気と闘う子どもたちに元気になってもらいたい。3年間、そう思い続けて練習に励んだ。

そして最後の夏。九回裏の攻撃、1死二、三塁と好機を作ったが、及ばなかった。点差は父が敗れた時と同じ1点差。「力は出し切れた。運命なのかな」

甲子園出場と父の雪辱はかなわなかったが、「大学で野球を続けてプロになり、病気と闘う子どもたちの力になりたい」。夢はまだ、終わらない。

＝多摩市一本杉

（狩野浩平、滝沢貴大）